

戦時下の日本社会を告発しつづけた個人雑誌の復刻版！

『他山の石』

〈桐生悠々〉

『嘉信』

〈矢内原忠雄〉

『近きより』

〈正木ひろし〉

ととともに記憶されるべき。

抵抗の雑誌であり、当時の知識人たちの動向を知る上でも貴重な資料。

諷刺家・生方敏郎の真骨頂を示す『ゆもりすと』も合わせて復刻。

古 人 今 人

こじんこんじん

全一卷・一九三五年〜一九四五年

付録『ゆもりすと』〈全二号・一九二七年〉+

解説・総目次・索引

本体価格 一八、〇〇〇円

生方敏郎 主宰

不二出版

◇推薦のごとば

良心的ジャーナリストの 貴重な遺産

家永三郎

一九四五年八月以前の日本では、言論・出版はきびしい権力の規制の下におかれていて、権力者への批判はきわめて困難であったが、とりわけ昭和十年代、十五年戦争の進行していくにつれ、表現の自由は逐次せめられて、ほとんど窒息にちかくなっていた。

そうした状況のなかで、社会的影響力の比較的小さい個人雑誌だけは、それ故に大目にみられており、気の狂ったような文章ばかり横溢している状況のなかで、細々ながら正論を唱え続けるものが見られたのである。

その一つとしての生方敏郎の『古人今人』にも、横暴をほしいままにする権力への痛烈な批判の文章が、つらねられていた。同じく個人雑誌として抵抗を貫いた矢内原忠雄の『通信』『嘉信』や正木ひろしの『近きより』に比べれば思想的基盤は弱いとはいえ、同時代の一般風潮に比べれば、その筆陣は貴重な精神的遺産とされてよいであろう。

『古人今人』の復刻版の出ることは、今日容易に閲覧できない良心的ジャーナリストの戦時下の活動を蘇らせるものとして、まことによろこばしい。

(いえなが・さぶろう 東京教育大学名誉教授)



生方敏郎と 雑誌『古人今人』

鶴見俊輔

戦争中の『古人今人』にでていた冗談を今も思いだす。「いっぽんこく」というくににいつの間にか入りこんでいて、歩く人はみな足が一本、というはなしだった。それを読んだときには、この冗談が、闇の中にひとつのあかりをともした。それほど当時の日本の状況をよくとらえた冗談だったからだ。

『古人今人』の編集者・生方敏郎の著書『明治大正見聞史』を読んだのは、今の冗談に接してから二十年近くたってからで、この本にも感心した。こどもの遊びの中に、西南戦争から日清戦争への時代のうつりゆきをとらえる卓抜な観察があった。この独創的な観察力を、生方敏郎は、戦時にも保ち得た、まれなひとである。

(つるみ・しゅんすけ 評論家)

◇内容見本

古人今人

(號三十二第)

生方敏郎文筆生活三十年記念展號

文筆生活滿三十年

迄人一生の夢を見たが、茶店の婆さんが彼の眠る前に炊きかけてゐ

又悟らず、食つて働いて寝て暮した。唯一度頭をあげて過去を顧る時、高山に登つて麓の村や野や川などを遠く眺める心地がする。過ぎ去つた總ての物事皆ほうつとし

ころ、それでは大に祝賀會でもやる可しだと皆が云つてくれるが、それは時節柄遠慮し度いと思ふし又多勢の先輩や友人に集つて頂いても、私は眼が悪いため皆さんのかざトンチンカン

妄動することは何もしるにありは生きてる證明になるかと思ひ直したので、又しても失敗の歴史に一頁を増補する氣で六月一日から五日まで別項記す如く回顧展をやることに決した。

社大黨 演説で勝ち
ビラで勝ち
人氣で勝つて
金で勝ちたり
さうせんきよ
人騒がせに
おほりけり
似たり寄つたる
顔ぶれにして

まこと そらこと集

物價暴騰対策
委員會

ぶつか騰貴で
儲かる人々を
動員し
たいさくを練る
夏座敷かな

労働爭議

足と手は
すとりいきして
もがけども
首腦は知らず
居眠りてあり

林内閣頑張ル

春來れば
雁は去るなり
せんきよ終り
大敗すれど
せいふ辭するなし

林首相

四面楚歌
學國皆敵と
なりぬれど
辭職せず
愚也
汝を奈何せん

林内閣總辭職

十七世紀の
ばけものどもの
乗り組みの
船は沈めり
夜や明けんとす

近衛公大命降下

近衛丸
くにたみこぞり
悦びの
盃をあげつ
舟出祝ふとて
惜しむべし
若殿原の

蛙鳴鳥啼

噫金子馬治先生

金子馬治先生が歐州から歸朝された時、私達は早大文科の二年生だった。明治三十七年の初夏、日露大戦争が始まつて間の無い頃だったと思ふ。

當事は坪内先生が授業時間を澤山受持たれ壯んにやつて居られた時ではあつたが、新たに新進氣鋭の金子先生を迎へたことは早大文科を俄に活氣づかせたものだつた。先生は私達の組では心理學を講ぜられたが、それは先生が獨逸でヴントから親しく教へられたところのものを講じられてるとか聞いた。即ち其當時に於ける世界一の心理學者ヴントの直傳といふのだから、

名が付けば
騒いでみたまものか
救世軍の士官でも

さて併し、私に何れほどの材料が有るか、若い時から資料に成りさうな物を集めて保存するなど、云ふ考へは無かつたが、物具で整理を全く怠つたのが傍俵して、塵積つて何とやら昭和四年に上沼袋の家へ移つた時には、ガラタタと共に相當澤山あつた。

ところが當時は私が一度外出すれば、後には頭はない幼児と老猫とで大人しく留守をしてゐる有様だから、家の中の品物は道傍へ並べて置くも同様で。十年の間に次から次と消え失せて行つた。併し之も亦た私が物具から整理を怠つた事が、失はれた最大原因と思はれる。その残物の中から何んな物が拾ひ出されるか、せいしく勉強してビールの古箱を引くり返してみやう。

越

賣會
島米螺
中雄作
浦非水
崎與三
藤三郎

▶第三号(一九三八年六月)より
▶第一号(一九三七年六月)より

◆復刻版『古人今人』概要

古人今人

全一卷

生方敏郎 主筆

B5判・上製・函入り

総五四二ページ

本体価格 一八、〇〇〇円

一九九〇年七月刊行

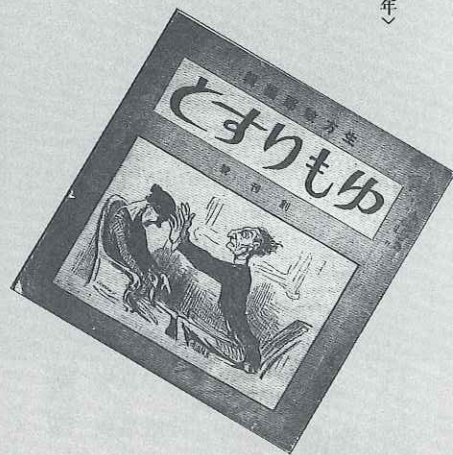
●収録内容

『古人今人』第一号〜第一〇二号（一九三五年〜一九四五年）

『ゆもりすと』全二一号（一九二七年）

解説・総目次・索引

解説 高橋新太郎（学習院女子短期大学教授）
 推薦 家永三郎・鶴見俊輔



●本カタログ中の表示価格は、
 全て消費税を含んでおりません。
 ●弊社は注文制です。
 ●お近くの書店にご注文ください。

◆関連図書〈復刻版〉のご案内

他山の石

全四巻・別冊一

本誌は、リベラルなジャーナリスト・桐生悠々が、激しい言論弾圧にも挫けることなく刊行しつづけた個人雑誌である。軍部政治の危険を訴え、中国との戦争に反対し、その死の床まで体制批判の筆をとり、日本の「一大軍縮」を展望した反骨の新聞人の良心が脈打つ。

桐生悠々 主筆

一九三四（昭和九年）六月〜

一九四一（昭和一六年）九月

A4判・上製・函入

総一、四九〇ページ

別冊 解説・総目次・索引

解説 荒瀬 豊（東京大学新聞研究所教授）

本体価格 一六〇、〇〇〇円

推薦 家永三郎 井出孫六

太田雅夫 むのたけじ



近きより

全一卷

本誌は、戦後、謀略・冤罪裁判で活躍した弁護士・正木ひろしが日中戦争直前に創刊し、敗戦の前後も休むことなく刊行された個人雑誌である。日本のアジア侵略に疑念を持ち政府の戦争責任を追及し、ファシズムへの抵抗の孤塁を守った。

正木ひろし 主筆

一九三七（昭和一二）年四月〜

一九四九（昭和二四）年一〇月

A4判・上製・函入

総六〇〇ページ

付録 解説・総目次・索引

解説 牛島秀彦（東海女子大学教授）

本体価格 一八、〇〇〇円

推薦 家永三郎 大島 渚

古賀正義 門奈直樹



不出版

東京都文京区向丘一―二―一二
 TEL 〇三（八一）二四四三三
 FAX 〇三（八一）二四四六四
 振替 東京六一九四〇八四